

play here outline 2025

はじめに

公園は「みんな」のためのものです。しかしながら、その「みんな」という枠組みに入ることには困難さを伴う方々がいます。例えば、車椅子を利用していたり、対人コミュニケーションに困難さを覚える子どもたちであり、その保護者の方々です。

小金井みんなの公園プロジェクト「play here」は、それらの課題に関する実態を把握し、問題の所在を見極め、当事者の方々・市民・関係者等との協同により、それらの解決を「インクルーシブ公園」をつくることを通して目指すものです。ひいては、小金井市における共生社会の実現に寄与することをも目的としています。

令和6年度の事業における様々な調査・検証等は、[「3つの公園における整備計画」](#)や「小金井市インクルーシブデザインに配慮した公園活用ガイドライン（公開準備中）」に結実しています。それらは、これからの具体的な環境整備や部局を横断した連携のために活用されていきます。また、それらの考案やプランニングの基礎となった[関係者の方々へのインタビュー](#)も含めて、プロセスや各種資料をオープンなものにすることで、できるだけ本事業の透明性を高めることも企図してきました（[公式サイト](#)では、様々な資料が公開されています）。

令和7年度においては、整備計画が実際に実行され、インクルーシブ化に向けたハード整備が進められます。が、それで終わりではありませんし、終わりにしてはいけません。それらを「みんな」望むものにしていくための活動が欠かせません。本資料は、そのための指針をまとめたものになります。

熊井晃史（play hereディレクター）

大切にすべき考え方（令和6年度より継承発展）

- ・ハード整備偏重を避けたい

遊び場等の整備において、ハード整備偏重は避けるべきです。ハードとソフト、そして持続的な運用体制が健やかに統合される状態を目指します。

- ・ソフト運用を踏まえた持続可能な体制構築を前提としたい

市内の公園では、市民によるマルシェイベントや移動販売等の利活用が促進されつつあり、指定管理者制度の面的な導入も始まっています。またそれらにおいて、小金井市の特色の一つでもある農業従事者の方々との連携も進められていますし、公園ボランティア制度や「プレーパーク」の実践の歴史も積み重ねられています。そのような市内の多様な主体との連携を引き続き推進することが望ましいと考えます。

・心のインクルーシブに配慮した普及啓発に留意したい

「障害の社会モデル」といった考え方を踏まえ、豊かに育まれるべきものは、私たちのリテラシーやマインドセットであると考え、普及啓発活動に注力します。

・地域の気運や住民の主体的な関わりを醸成したい

当事者の方々・市民・関係団体等との協同を基礎とし、また子どもたちとの対話の機会を大切にしていきます。

・中長期的な目線で解決したい

小金井市が管理する公園の数は200を超えます。インクルーシブ遊具の導入といったハード整備の面から見ると、それら全ての公園に対して一律的な整備を行うことは現実的ではありません。とはいえ、老朽化した遊具やトイレ等の再整備の際に、インクルーシブデザインの観点で配慮されたものに置き換えるといった検討は積極的にしていくべきと考えます。

・知見を深めたい

障害と言われるものには、目に見えやすいものから見えづらいものもあります。さらには、障害があるとされる人たち、そして障害がないとされる人たちも、同じように個性を持ちます。それぞれの「公園で遊びたい」という気持ちが阻害されないための工夫や制度。それらをしっかりと捉えていく必要があると考えます。

令和7年度の主な施策（案）

関係者連携促進

小金井市及び周辺エリアでは、様々な医療・福祉・教育関係者による活動が進められ、産官学民の立場を越えた相互の連携が図られています。公園を例に挙げれば、小金井市内の公園を中心とした220施設を舞台に、[株式会社日比谷アメニスによる一元的な管理運営](#)が2024年より開始されています。2025年には、地域で50年の歴史を持つ[社会医学技術学院との連携協定](#)を締結しました。そこでは、play hereとの連携が明記される他、「理学療法や作業療法等の知見を活用した社会的処方」が着目され、「域学連携（大学等と地域の連携）」が推進されています。個人や団体による特筆すべき活動は枚挙に暇がありません。play hereでは一連の活動を通して関係者連携の機会を創出していきます。

整備された公園のインクルーシブ化に寄与する活用

2025年度において、栗山公園・梶野公園・三楽公園でのハード整備が行われます（整備内容は、[公式サイトで公開している「整備計画案」](#)を御覧ください）。それを、本当に障害の有無に関わらず誰もが遊ぶことのできる状況にしていくためには何が必要か？重要視すべきは、支援する・されるといった関係を越えて、「共に事にあたる」ということであると考えています。当事者の方、地域の方、関連事業者の方など、様々な関わり合いを育むことで、地域におけるインクルーシブというものの理解をみんなで深めていくことを目指します。また、それらを持続可能なものとするために、構築すべきゆるやかな実践コミュニティのあり方も検討していきます。

3つの公園で「共に事にあたる活動」を起こしていきます

・栗山公園：みんなで「ビオトープ」をつくる

栗山公園には、池があります。カモの子育てスポットとして地域で人気がありますが、水を汲み上げるポンプの故障（現在は修理済み）や蚊の発生という課題もありました。そこで、既存の駆体を活用し、カモにも、その他の動植物にも居心地の良いビオトープをつくりたいと考えています（なお、車椅子やベビーカーでも近接することができるスロープの造成も予定しています）。

・梶野公園：みんなで「日陰」をつくる

梶野公園の、いわゆる遊具というものが無い原っぱ空間は、長らく愛され大切にされてきました。一方で、近年の気候変動も影響し、日中の日照の厳しさが課題に。そこで、パーゴラを建てキウイ等の植物を育てることで、日陰の休憩スペースをつくりたいと考えています（果実の収穫や活用といった発展もあろうかと思えます）。

・三楽公園：みんなで「ひとやすみ」をつくる

三楽公園では、球技遊びの利用が活発である一方で、それ以外の過ごし方との共存が難しい局面がありました。そこで、ボールの飛び出しや安全確保のためのフェンスを造成し、グラウンドスペースの反対側にはファーミングスペースを設けます。時には市内の農家さんにも知見を頂きながら、みんなのリラックスのためのハーブを育てたいと考えています。お茶やアイピローやお香など。収穫したものを加工して使ったり、市内の事業者の方に使ってもらったり。そういった広がり期待されます。

公園の使い手であると同時に担い手というあり方を探求します

これらの活動のプロセスの中で、整備されたハードのより良い使い方の検討や普及、今後のための課題抽出といったことを叶えていきます。また、それらはインクルーシブ公園の「使い手であり、担い手」という層の広がりを醸成していくことにもつながると考えます。

市立小学校でのインクルーシブ授業開催

インクルーシブ遊具があつたとしても、「心のインクルーシブ」がそこに無ければ、行けない。これは、多くの当事者の方々から寄せられたご意見でした。では、どうするべきか？様々なアプローチによる普及啓発活動の推進が考えられますが、実際に公園を利用する子どもたちに伝えていくこと、そして、子どもたちの声に耳を傾けていくこと。それを大切にしたいと考えています。そこで、**play here**の推進で得られた知見やネットワークを活用し、市立小学校で出張授業を展開します。

・当事者の方とともに授業プログラムをつくりたい

令和6年度より、当事者の方とともに授業プログラムを作成し出張授業を展開しています。実施場所や回数はまだ限定的ではありますが、できるだけ市内全域に広げていきたいと考えています（**play here**と連携し、出張授業やトークイベント等の実施にご関心がある方がいらっしゃいましたら、お気軽に[お問い合わせ](#)ください）。

・公園整備の工夫を伝えることで理解を育みたい

公園のハード整備には、インクルーシブであるための工夫が成されています。ただ、その工夫を意味のあるものにしていくためには、使う人の理解が欠かせません。子どもたちの生活にとって身近な公園を学びの舞台として活用

し、それらの理解を育んでいきたいと考えます。当然のことですが、障害があるとされる人にも、そうでないときれる人にも個性があります。障害と一口にいても、目に見えやすいものから、見えづらいものもあります。普段の学校生活や社会生活においても重要な、それぞれの違いを理解し合うことにもつながっていくはずです。

子どもの遊び場等における配慮事項等の掲示内容の作成

公園ではサイン看板等の掲示物が設置されることが通例です。それは公園をインクルーシブなものにするための重要なコミュニケーション・メディアでもあります。そこで、それらの制作と活用を大切な機会として捉えた活動を展開していきます。

- ・当事者の方とともに訴求内容を考え、掲示物をつくりたい

そもそもどのような配慮事項の訴求が必要か？まず、そこから当事者の方々と共に考えていきます。

- ・現地勉強会を開催したい

訴求内容が明確になったとしても、その理解が掲示物の設置のみでもたらされるとは考えづらいものがあります。重要なのは、それらが人々のコミュニケーションの補助線や起点になることです。「読んでおいてください」というようにモノだけで解決しようとするのではなく、人々の関わり合いのなかで理解を促進していくことが必要です。そのため、現地でのお披露目会や勉強会等を開催し、公園を学び合いの舞台として活用していきます。

- ・継続的に更新できる仕組みにしたい

実際の掲示物には、設置数の限りがあったり、そもそも訴求内容の改訂や改善が必要になったりすることが見込まれます。ただし、それは問題ではなく可能性です。なぜなら、当事者の方々とともに集い議論する機会の継続性が担保される理由にもなるからです。

令和6年度試行的事業（栗山公園のんびりデー）の継続推進

令和6年度に実施したplay hereのコンセプトイベント「栗山公園のんびりデー」は、市内外の関係者が集い、様々な知見や経験が持ち寄られました。例えば、当事者の方々によるポップアップショップの他にも、例えば「食のインクルーシブ」という側面での試行がされたり、目に見えづらい障害へのケアの必要性という課題を再認識する機会にもなりました。公園は、ありがたい未来のための練習場。そのために、令和7年度においても継続開催します。

- ・関係者連携促進

各種関係者連携促進の進捗や成果をアウトプットする機会とします。

- ・play hereの周知機会

play hereそのものの活動を周知します。

- ・挑戦や試行をする機会

「食のインクルーシブ」「目に見えづらい障害へのケア」「多様な就労支援」「不登校支援」「やさしいにほんご普及」など、扱うべきテーマは山積しています。既に実践されている活動と連携したり、まずやってみたり。そういった機会になればと考えています。

情報発信

play hereでは、より一層の情報発信に力を入れていきます。普及啓発活動の一環になるからでもあります。なによりも、引き続き多くの方々の声と共にありたいと願うからです。なぜなら、「広報」というものは、「広聴」という活動に裏打ちされているように、より良い発信には、より良い受信が先立つ。そう思います。

・地域の関連者との情報発信連携

地域には、「既にそこにあるインクルーシブの種」とも言えるものが多くあります。新しく始めることも大切にしつつ、様々な地域資源を組み合わせることも大切に。そのような想いで、例えば、[小金井市の「冒険遊び場（プレーパーク）事業」を展開するNPO法人こがねい遊パークと共同でリーフレットの制作と配架を進めています](#)。ハード整備が進められる3つの公園を舞台とした連携とともに、地域の活動を紹介していく情報発信連携も進めていきます。

・地域内外への発信

play hereは、局地的な市内での活動ではありますが、積極的に地域内外へ発信することで、活動の精度をあげていきたいと考えています。また、ひいてはplay hereがインクルーシブ公園のあり方の例として参照されるべき事例となることを目指します。そのためにも、公共空間の利活用等を専門とし、全国的なネットワークを持つ方やメディアと連携し、play hereの活動全体の深化と発展を図ります。

参考文献

play hereの活動は、端的に言えば「自治」を育むことであると思うに至りつつあります。少し堅苦しい言い方ではありますが、つまりは「みんなでどうにかしていく」ということです。支援する・されるでもなく、教える・教えられるでもなく、共により良い社会をつくっていく。そのようなことです。しかしながら、この「みんな」という言葉には注意が必要です。なぜなら、まさにその口当たりの良い言葉である「みんな」の捉え方こそが問題であったからです。

インタビュー等で寄せて頂いた言葉がそうであるように、多くの方々の声がplay hereの構想や議論を支えてくれています。そして、その声の機微をより理解するためにも、関連書籍に当たり続ける日々でもありましたし、それは今でも続いています（インタビューデータや参考文献も[公式サイト](#)にて公開しています）。

ここでは、「みんな」と「自治」にまつわる示唆を与えてくれた一説をご紹介します。

新パラダイムの「心のバリアフリー」では、障害者に困難を生じさせている社会的障壁の存在に気づくこと、さらに、そうした障壁は、これまで社会がマジョリティである非障害者の利害を優先し、マイノリティである障害者の利害を無視・軽視してきたという偏りの堆積物であると感じることが重要視されている。つまり、私たちが生きているこの社会が、現に不均衡なものとして成り立ってしまっているという認識が、重要なエッセンスとして置かれている。しかし、「心のバリアフリー」の目標が、未来において実現されるべき社会像として設定され、それが「すべての人」とか「誰も」といった無人称の形で一般化されるとき、そうした現実の不均衡についての認識が後

景化する恐れがある。～中略～ 「すべての人が」「誰もが」など、人びとの間にある差異や多様化を平板化するフレーズは、その通りのよさと引き換えに、一部の人の生において現に起こっている深刻な問題から目を反らす効果をもっている。

飯野由里子・星加良司・西倉実季『「社会」を扱う新たなモード - 「障害の社会モデル」の使い方』（生活書院）

頼りない一人がおずおずと始めてしまったことを周りが受け止め、彼だけでなくその周りにいる人たちの声や、自分自身の内なる声に耳を傾けるなかで始まることもある。そうやって始まったことが、様々な形で反響を呼び、そしてかかわった人たちにとって大切な動きになっていく。頼りない<私>たちが、お金の力に頼ることなく、国や大きな権威にお墨付きをもらうこともなく、自分たちにとって生きることを励ます営みを生み出すこと、それを僕は<自治>と呼びたい。自治とは、誰かに支配され、コントロールされたり、誰かに所有され管理されたりはしない、自分やほかの生命を大切にしたいと思う<やさしさ>から生まれる。

猪瀬浩平「ボランティアってなんだっけ？」（岩波ブックレット）
